

## 研究ノート「孔子像及び四聖配像」について

平川 信幸\*

### Notes on "Confucius and His Four Disciples on a Scroll"

Nobuyuki HIRAKAWA\*

#### はじめに

この度、故尚詮氏が所蔵されていた「孔子像及び四聖配像」「林勿郵殿撰贈琉球中山王詩書卷」「梅清筆山水画」「陶庵贈鷺泉宛漢詩」「名渡山愛順画尚順男爵・真子夫人肖像」「巴紋鏡」など、6件の貴重な資料が沖縄県に寄贈された。何れの資料も、沖縄県の歴史の空白を補う重要な資料であり、寄贈された夫人の尚弘子氏にこの場を借りて深く感謝の意を示すものである。

さて、本稿では6件の資料の中から「孔子像及び四聖配像」(以下に「孔子像」と略記する)について、その特定につながった鎌倉芳太郎氏の大正期の写真資料や調査記録により、現状と経年による変化について比較する。続いて、図像が保管されていた久米村の孔子廟の創建や創建当時の社会背景を明らかにすることによって図像の制作年代や制作地などを探っていく。最後に、図像の分析を行いたい。密教を中心とした仏像や仏画などは儀軌などによってその表現形式が定められており、モチーフより像主や作品の意味などを読み取ることが出来る。しかし、儒教に関する絵画や彫刻については、こうした先行研究が少なく、今後データの蓄積が必要になってくるのではないかと思われる。そこで、「孔子像」については現状で特定できるモチーフについて図像学的に分析を進めていきたい。

以上、本稿では作品の状態、歴史的背景、図像学的見地から分析を行い、その制作年代や制作地について考察を行いたい。

#### その背景と状態について

寄贈作品の「孔子像」特定には、鎌倉芳太郎氏の『沖縄文化の遺宝 写真』<sup>1</sup> (以下に『遺宝』と略記する) が大きく関わっている。

まず図像では、中国皇帝の衣裳である「袞冕服」を着た人物を中心に四人の家臣達が左右に配されている点において、衣装の形態や家臣の人数は多少違うものの、琉球の国王像にかなり類似している。そのため発見当初、この図像は国王像ではないかと思われていた。しかし画面上部の装飾が施された贊「萬世師表」より「孔子像」であることが分かった。また、『遺宝』により、この資料がかつて久米村の孔子廟内にあったことが確認できた。そこで、鎌倉氏の調査時期を追ながら、資料の撮影時の状態と現状を較べ、経年による状態の変化を調査し、「孔子像」の時間的な経過の考察を行いたい。

鎌倉氏の写真資料と氏が調査の際に記録した、いわゆる「鎌倉芳太郎ノート」(以下に「鎌倉ノート」と略記する)は、昭和60年と平成2年に沖縄県立芸術大学に寄贈されており、資料の整理にあたった原田あゆみ氏によって鎌倉氏の沖縄調査の様子や資料の概要などがまとめられている<sup>2</sup>。

原田氏は鎌倉氏の沖縄での調査方法とその内容から調査時期を三回に分けている<sup>3</sup>。すなわち、

#### 【前期】

- 沖縄県女子師範学校美術教員期  
1921 (大正10) ~ 1923 (大正12)
- 第1回琉球芸術調査  
1924年 (大正13) 5月初旬

\* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan



図1 「孔子像及び四聖配像」（沖縄県立博物館蔵）

### 【中期】

#### ○第2回琉球芸術調査

1926年（大正15）～1927年（昭和2）9月

### 【後期】

#### ○『歴代宝案』調査

1933年（昭和8）8月

#### ○城跡発掘調査

1937年（昭和12）1月

こうした調査の時期や内容の詳細は鎌倉氏の研究の集大成である『遺宝』や「鎌倉ノート」よりうかがうことが出来る。そこで、『遺宝』の記載を中心、「孔子像」の調査時期を考えてみたい。

『遺宝』の「第二部 沖縄各地の遺宝と遺跡と神事」には各章、地域ごとに別れて旧家や寺院、廟、神社、芸術作品などについて写真の解説があり、「第八章 泊、天久方面」に天久聖現寺、權現宮とともに至聖廟（孔子廟）が掲載されている<sup>4</sup>。この章の区分けによって天久聖現寺、權現堂、至聖廟（孔子廟）はおそらく同時期に調査されたと推測される。しかし、調査日の記載がないため、これらの旧家や寺院、廟、神社、芸術作品などが撮影された時期については具体的に知ることが出来ない。

そこで『遺宝』の調査日を補完する資料として「鎌倉ノート」がある。「鎌倉ノート」は総数81冊において、その内容は調査記録、研究ノート、雑ノート、古文書の筆記など多岐にわたる。原田氏は、この膨大な情報の中より前期の1921（大正10）～1924年（大正13）5月初旬までの沖縄調査に関わる情報を抜き出し表にまとめており、鎌倉氏の足跡をたどっている<sup>5</sup>。

また、前期の調査の成果は、1924年（大正14）、啓明会主催の展覧会および講演会という形でまとめられ、当時の様子は『琉球藝術展覽會陳列目錄』<sup>6</sup>、『啓明會第十五回講演集』<sup>7</sup>などによって知ることが出来る。以上のことより、具体的に状況が分かっている前期の調査を中心に論考を進めていく。

まず、原田氏の表により調査日の確認作業を行った。しかし、天久聖現寺をはじめとする泊、天久地域の調査日の記載を見つけることが出来なかつた。

ただし、1923年（大正12）8月29日に泊、天久地域に隣接し、孔子廟がある久米村と関わりの深い那覇市若狭町の龍王殿、天尊廟、天妃宮の調査が行われている。また、同年9月14日に浦添御殿へ移設していた首里の孔子廟の調査の記載があった。さらに、『琉球藝術展覽會陳列目錄』には、資料が13のジャンルに分類されており、「四、彫刻」、「五、建築」には小項目として「孔子廟其之他儒教信仰に屬する彫刻」、「儒教建築」が設けられており、1942年（昭和17）以前に孔子廟の調査が行われた形跡がある。このことから今回、寄贈された「孔子像」は、前期の1921（大正10）～1924年（大正13）の間に調査されたと考えられる。

このことをふまえた上で、『遺宝』に掲載された1924年以前と現状の「孔子像」との比較を行いたい。

また、「孔子像」は寄贈時に経年によって展示に耐えられない状態にあったため今回修復を行った。修復報告書によれば「時代的な汚れが見受けられる」とあり、仏画などに見られる線香などの煙によって全体が黄ばんだ状態であった。この黄ばみは鎌倉氏の調査当時からのものと思われ、おそらくこのことは図像が信仰の対象として礼拝されたことを意味する。修復前の損傷状況には、「本紙には、横折れや立て折れ多数生じている」、「絵具の粉状剥離が進行中で、所々剥離剥落が生じている」、「本紙には欠損箇所が見受けられる」とある。さらに、全体的に水がかかった形跡があり、表具や本紙の色落ちが見られた。

こうした状態を『遺宝』掲載のもの図版2と図版1と比較し、顕著な変化を図版3にまとめると次のような指摘ができる。まず、「②帳および縁」は『遺宝』のものでは帳の八角形の幾何学模様と縁の龍紋が消えている。「④てすり」においても唐草文様が消えており、後ろの木目がうっすらと透けて見える。また、模様の剥落のほかに色落ちまたは色落ちによる汚れが見られる。色落ちは「③足下」と「①背景部分」に生じており、背景部分に至っては孔子の背もたれから流れ落ちた絵の具が背面の龍まで広がっている。その他に孔子の頭上と腰の部分に折れ跡が見られる。

以上、「孔子像」と『遺宝』掲載の写真資料との比較を行った。鎌倉氏の調査の20年後、孔子廟のあつ

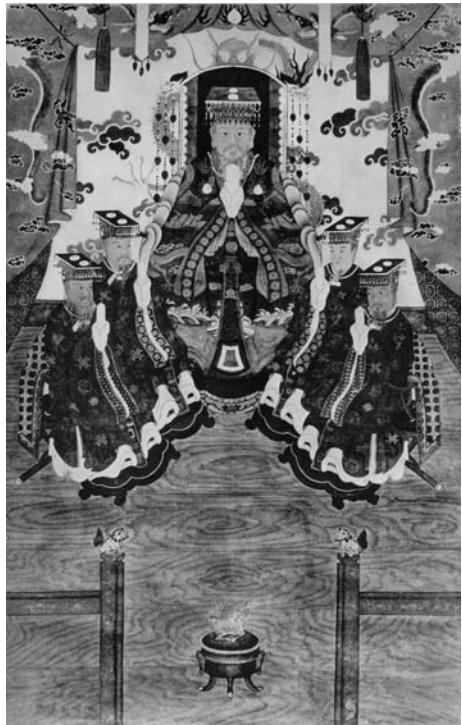


図2 「孔子像及び四聖配像」  
(鎌倉芳太郎. 1982. 『沖縄文化の遺宝 写真』. 岩波書店)

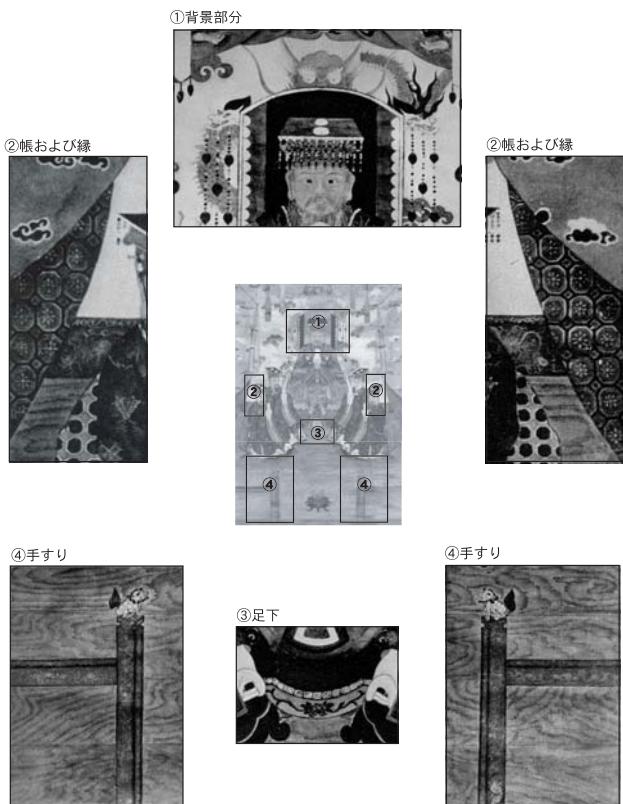


図3 「鎌倉資料との比較」  
①背景部分. ②帳および縁. ③足下. ④手すり  
(鎌倉芳太郎. 1982.) より加工

た那覇の街は10.10空襲によって灰燼に帰し、この資料も今回の調査によって、その作品名が確認されるまで焼失したものと思われていた。痛々しく見える折れ跡や、水に浸かって流れた絵の具から、逼迫する戦況の中で、慌ただしく疎開してきたこの「孔子像」がたどってきた足跡を垣間見ることが出来る。

### 琉球の孔子廟について

次に、孔子像の制作年代を探るために孔子像が安置されていた孔子廟について述べたい。

琉球の孔子廟の創建はまず、久米村の孔子像祭祀から始まる。久米村の蔡堅が1610年（万暦38）に進貢使として中国に派遣された時、山東省曲阜の聖廟を参拝した。その折に、孔子の絵像を持ち帰り、郷村の士大夫の家を輪番で祀り、祭典を行なったのが初めであるという<sup>8</sup>。その後、本格的な孔子廟の建立は1671年（康熙10）、金正春が孔子廟建立の件を尚貞王に啓奏して許可を受け、翌72年に廟地を泉崎橋頭の久米村に選定し、石垣の工事を皮切りに、大成殿など内部の建物の着工を行い、1674年に竣工した。1675年5月に孔子および四配の聖像の塑像に着手し、翌76年1月完成した。この年から毎年春秋の二回、最初の丁の日に釂奠が行なわれるようになった。孔子廟の正門には「至聖廟」の扁額が掲げられ、地元では中国語風に「ティシンーブー」とよび習わした。工事の様子や関係者については、孔子廟の手前に建立された「中山孔子廟記」<sup>9</sup>に記されており、今回、その記載内容から「孔子廟（至聖廟）略年譜」を作成した。「中山孔子廟記」によれば、平田典通が「孔子および四聖」の塑像制作を行い、絵師查秉徳（仲宗根親雲上）が室内の装飾を行ったことが分かる。また、1716年（康熙55）には塑像の修復が行われ、彩色を絵師吳師虔（山口宗季）が行っている。塑像を制作した平田典通<sup>10</sup>、室内の装飾を行なった查秉徳（仲宗根親雲上）<sup>11</sup>、塑像の再彩色を行った吳師虔（山口宗季）<sup>12</sup>など当時の琉球を代表する陶工、絵師達が関わっている。

こうした孔子廟の建立に関わる資料を確認したが、「孔子像」の図像や由来に関する具体的な資料は得られなかった。また、1921（大正10）～1924年（大正13）に「孔子像」の調査を行った鎌倉氏も「その由来は知るよしもない」<sup>13</sup>と述べている。

そこで、首里の孔子廟の創建年代について考察を行いたい。

首里の孔子廟は、「首里新建聖廟碑文」<sup>14</sup>によると、久米村の孔子廟建立に遅れること約130年、1801年（尚温7）に建立計画が立てられるが、国王の死去と財政難によって中止される。その後、1837年（尚育3）9月にようやく竣工する。

建物の様式は久米村の孔子廟と類似しており、赤茶色に塗られ、廟内の大成殿は敷瓦の床であった。ただし、久米村のものと違い、孔子・顔子・曾子・子思子・孟子の聖像ではなく、角柱形の台座を固定した神位（位牌）だけであった。また、殿内中央には尚育王親筆の「万世師表」の扁額が掲げられていたという<sup>15</sup>。首里孔子廟の創建に際して「孔子像」の図像に関する記載を見いだすことは出来なかつたが、廃藩置県後の1898年（明治32）に、孔子廟の敷地を沖縄県師範学校に譲与する移転問題が起こつており、当時の『琉球新報』の記事に孔子の肖像を意味する「聖影」という文字が見える。

「（前略）尚家に於ては既に敷地を師範学校に譲渡し且つ聖影は久米の聖廟に合併せん事に内定せる場合に於て朝忠等か殊勝にも自から之を引取り且つ鄭重に祭典を執行せんとするの特志に免じて其請願を容れ遂に今回愈々其移転を見る事とはなりぬ（以下略）」<sup>16</sup>

とあり、下線部から孔子に関する図像あるいは塑像があり、久米村の孔子廟との合祀が内定していることがわかる。

さらに記事の書かれた背景について詳しく述べると、孔子廟の移転問題に際し、旧按司家の浦添朝忠が、首里孔子廟の所有者であった尚家に対して自宅への孔子廟の移築を申し入れており、そのことに対して人々が異を唱えたことを批判的に報道しているもので、孔子廟の移転の経過が具体的に知ることが出来る資料である。

結局、1898年（明治32）に起こつた首里孔子廟の移転問題は、大成殿、祭器、位牌等を首里桃原の浦添朝忠宅に移ることで一応の解決が図られる。

この記事以降、孔子の「聖影」の記載は見られず、1935年（昭和10）に首里の孔子廟の調査に入った田辺泰の『琉球建築』<sup>17</sup>にも、その記載はなかつた。

おそらくそのまま浦添氏宅に移らず、当初の予定どおりに久米村の孔子廟に移転したと考える方が妥当であると思われる。

では、この「聖影」はどのようなものであったか。残念ながらこの「聖影」に直接関係する資料が見いだせない。鎌倉氏が調査に入った大正年間、久米村の大成殿には前述のとおり創建時に作られた孔子の塑像とは別に今回寄贈された「孔子像」があつた。

大成殿には孔子と重要な弟子達の位牌が祀られ、そのイメージを補うように彫刻や絵画が配置されている。このような状況を考慮した場合、位牌と共に孔子と弟子達のそれぞれの像があり、さらに彼らの図像があるのはやはり何らかの事情が想定できる。何らかの事情とは移転騒動であり、この「孔子像」は本来首里にあったものが久米村に持ち込まれたものと推察される。

前述したように、鎌倉氏が「孔子像」について「その由来は知るよしもない」と記していることは、孔子廟の移転騒動が日清戦争の後、土地制度の改革やそれに関わる旧支配者階級の特権の消失による政治的運動とも関わっており、混乱した状況の中で「孔子像」の移管が行われたことを考慮すると理解することが出来る<sup>18</sup>。つまり混乱した状況の中で、「孔子像」の作者や由来などが久米村に伝承されることなく移管され、20年後の鎌倉氏の調査に至つたのではないだろうか。

#### 「孔子および四聖配像」の図像について

「孔子像」を見ていくと図像には孔子像以外に様々なものが描かれている。

まず、図像上部に「萬世師表」の文字が独特の書体で記されている。この言葉は孔子が何時の世までも孔子が道徳の手本であるという意味で、康熙14年（1667）にこれまで「大成文宣」と諡号されていたものを「萬世師表」に改題したらどうかという申し入れに対して、同22年（1675）、康熙帝が自ら筆を執り、大成殿および各省の学宮に「萬世師表」の額を掲げさせたのが初めである<sup>19</sup>。琉球の孔子廟においても、乾隆21年（1756）に来琉した冊封使周煌の『琉球国史略』<sup>20</sup>の中で「萬世師表」の額を掲げていたことが分かっており、本図もこうしたことふまえたものだと思われる。このことより本図の制

作の上限が乾隆22年（1675）ということが明らかである。

中央に視線を移すと、孔子像に四聖とよばれる四人の弟子が配されており、弟子達は昭穆制の配列により孔子を基点に左右交互に並んでいる。すなわち、画面奥の向かって右側に顔子、その対面が曾子、手前の右側に子思、その対面は孟子となる。曾子、子思、孟子はそれぞれ豊かに髪を蓄えた姿で表されているが、それぞれに明確な特徴がないため昭穆制の配置がなければ識別が難しい。それに対して顔子は一人だけ若い容姿で描かれている。これは、顔子が三十二歳という若さでこの世を去ったという故事に基づいた表現によるものと思われる。

次に孔子像について述べたい。孔子像は大まかに分類すると、行教像、司寇像、衰昇像の三種類に分けられる。行教像とは、在野で弟子達の教育にあたる孔子を表現したもので、巾という小さな布で髪の毛を束ね、簡素な儒服を着た姿である。司寇像とは、孔子が魯の国司寇（司法大臣）となり、宰相も兼任して政治手腕を振るった五十代も半ばの姿を表したもので頭に法官の冠をつけ、首には「方心円領」という天円地方（天は丸く、大地は方形）の世界觀を象徴するネックレス状の飾りをつける姿が特徴となっている。そして、衰昇像は「衰服昇冠」という皇帝の礼服を着た姿である。孔子は、数千人の弟子に敬愛されるその人徳を讃えて生前から「素王（徳あって位なき王）」と称されていたが、実際に国王や皇帝になったことはない。ただし唐の開元27年（739）、玄宗皇帝が孔子に「文宣王」という王号を追詮し、唐から宋代にかけて孔子像を皇帝の正装の衣冠である衰昇の姿で表すことが定着していく。孔子廟に祀られる孔子の像にはこの衰昇像が多く、今回、寄贈された「孔子像」もこれにあたる<sup>21</sup>。ただ、今回の孔子の衰昇像は御後絵と共に琉球独自の表現が見られる。

「衰昇服」は漢民族の衣装で、その基本となる色彩、形、様式、模様などは様々な古典<sup>22</sup>に記され、歴代の漢民族の王朝はこれらの古典の記述を基本として状況に応じて衣装を規定していったもの思われる<sup>23</sup>。モンゴル族の元朝を倒して、漢民族の明朝を建てた洪武帝は、洪武16年（1838）に衰昇を制定

している<sup>24</sup>。こうした衰昇冠服をはじめとする、朝服や常服などの衣装に関する制度は『大明會典』にまとめられている<sup>25</sup>。その中には琉球国王の着た皮弁冠服の規定もあり、こうした規定をふまえた上で冊封の際に皮弁冠服が琉球国王に下賜された。しかし、満州族が建てた清朝にいたると当然、明朝の衣装体系とは別の満州族の衣装が王朝の衣装となる。清朝は征服地における漢民族の降伏の証として満州族の髪型である弁髪とその衣装を着用することを義務づけた。こうした流れの中で冊封体制下にある琉球においても、清朝による頭髪と衣装の強要が心配されたが、衣装の代わりに、群王の位にあたる模様が織りこまれた布を下賜するようになった<sup>26</sup>。琉球は清朝より下賜された布から前代の『大明會典』をもとに独自の解釈<sup>27</sup>を加えて皮弁冠服を制作したようである。

こうして制作された衣装を着て琉球国王は御後絵として描かれた。琉球で作られた皮弁冠服の特徴は形とともに模様にも現れている。

そこで尚敬（図版4）以降の御後絵の国王像が穿っている皮弁冠服の模様を見ると、両肩にはそれぞれ一匹ずつ鱗（図版5）が描かれ、膝の中央には八宝平水紋（図版6）がある。原田禹夫氏はこうした文様の意匠は清朝より与えられた鱗緞によるものではないかと論じている<sup>28</sup>。

以上のことから、改めて孔子像の衰昇服を見てみると、尚敬の皮弁冠服と同じように両肩にはそれぞれ一匹ずつ鱗が描かれ、膝の中央には八宝平水紋がある。本来、皇帝が着用する衰昇服には「九章」と呼ばれる、皇帝を示す九つの模様がデザインされているが、孔子像の衰昇服には付けられていない、つまり、この「孔子像」は御後絵と同じデザインの衰昇服を穿っていることから、琉球が清朝から冊封を受けた以降に琉球で描かれたと考えられる。

最後に「孔子像」の背景について述べたい。孔子の足下には丁寧に木目が表された床と香炉が描かれている。この床は、板の木目が奥に行くほど太く描かれており、図像の後方が強調される逆遠近法的な効果によって孔子像がより浮き立つような空間処理が施されている。香炉は、黒一色の濃淡により立体表現がなされ、蓋の上に麒麟の飾りがついている。孔子には麒麟に関する出生譚があり、麒麟は孔

子を示すシンボルとなっている<sup>29</sup>。背景と帳には龍の図像が描かれている。前述したとおり、孔子は唐朝の玄宗に文宣王に封じられたことから、天子の象徴である龍も孔子のシンボルとなっている。また、

龍は孔子誕生の際に二匹の龍と五人の神仙が孔子の生家を取り巻いたという伝説とも結びついている<sup>30</sup>。

因に戦前久米村の孔子廟、大成伝（図版6）において二匹の龍が孔子像の背景を飾っていた。

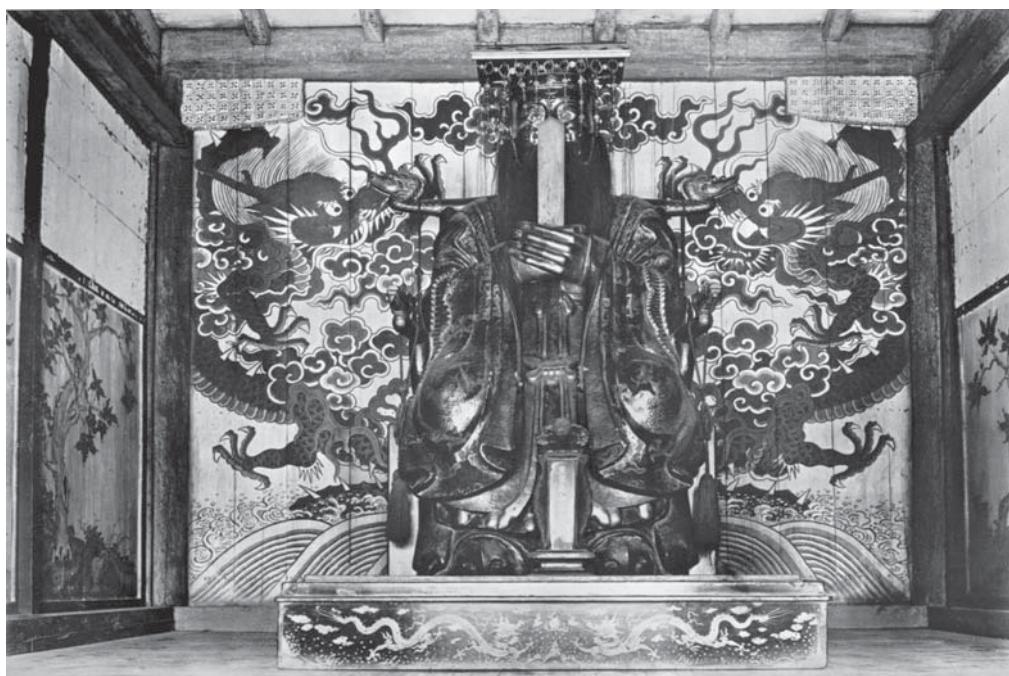


図4 「那霸文廟（至聖廟）孔子像」  
(鎌倉芳太郎. 1982.)



図5 「十三代尚敬王御後絵」  
(鎌倉芳太郎. 1982.)



図6 「尚敬王（拡大部分）八宝平水文」  
(鎌倉芳太郎. 1982.)

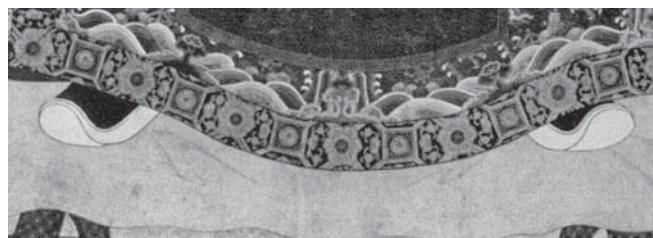


図7 「尚敬王（拡大部分） 蟠蛇模様」  
(鎌倉芳太郎. 1982.)

表1. 孔子廟（至聖廟）略年譜

久米至聖廟（孔子廟）

西暦	年号	事項	関係職名	関係者
1610	萬曆38	聖像の図を持ち帰る		紫金大夫蔡堅
1672	康熙11	尚貞王に孔子廟の建立を願い出る		紫金大夫金正春
		孔子廟の建立地を選定する		
		孔子廟の石垣の工事を行う	督工官	大夫金正華 大夫蔡琳 都通事程泰祚
1673	康熙12	孔子廟の着工	督工官	都通事金正華 大夫金正華 通事阮廷嘉
1674	康熙13	孔子廟の竣工		
1675	康熙14	孔子像の製作	督工官	正義大夫蔡国器 通事紅白換 金世銘
			塑匠	宿藍田
			画師	查秉德
1685	康熙24年	尚貞王に孔子廟の改修を願い出る		長史蔡鐸
				長史王可法
		王の命により改修を行う		紫巾官蔡芝
			工正所工	毛良茂
1715	康熙54	尚敬王に孔子廟の改修を願い出る		臣（程）順則 長史阮瓊 通事鄭廷極
		廟の改修始まる	工正官	向其聖
			修之筆者	衛受瑞 金饒地
			董瓦官	毛興祚
1716	康熙55	聖像および四配像の修復	督飾官	毛輔德
			画師	吳師虔

## 首里孔子廟

西暦	年号	事項	関係職名	関係者
1839	道光16	尚育の命により三月着工し九月竣工	督工奉行	向世盛古謝按司塑憲 孟開基西平親方宗紀 毛鴻勲池村里之子親雲上安富
			筆者	麻大勲伊佐筑登之真俊 胡秉仁山城筑登之正命 薛肇新渡慶次筑登之賀勢 経文魁仲本筑登之兼教
			兼管建廟事務	向邦憲野村親方朝厚 向良弼國吉親雲上朝章 馬執宏豊平親雲上良全
			木大工	比嘉筑登之親雲上
			石大工	金城筑登之親雲上
			瓦大工	玉城筑登之親雲上
1899	明治32	孔子廟、浦添家へ移転		

## ま　と　め

以上、寄贈された「孔子像」を大正期に行われた鎌倉芳太郎氏の資料調査の様子や当時の写真などから、戦前のものと現在のものとの状態の比較を行った。次に鎌倉氏の調査の状況や、孔子廟の歴史的背景から、「孔子像」が1898年（明治32）に首里の孔子廟から久米村に移管されたのではないかと指摘した。そして、最後に「孔子像」の图像学的分析から、その制作年代と制作地が沖縄であると指摘を行った。

このように「孔子像」について、様々な視点から分析することによって制作年代や時代性などが明らかになった。こうして明らかになった作品の背景はその価値を減ずるものではなく、むしろ、年月を経てきたことに大きな意味があるのではないかと思う。

「孔子像」が首里の孔子廟から久米村の孔子廟へ移され鎌倉氏の調査を経て沖縄戦を迎えたことは、世代わりの中での王国の道徳原理の一つを支えていた首里・久米村、それぞれの地域での儒教と孔子廟の変遷を意味する。前述したとおり首里では孔子廟が移され、敷地は師範学校に変わった。久米村では1898年（明治32）の首里の孔子廟の移管騒動の後、1902年（明治35）に内務省の所有であった孔子廟を那覇区に移しており、1914年（大正3）には孔子廟の有志を募り、社団法人久米崇聖会を結成し近代的な孔子廟の運営に乗り出している。<sup>31</sup>

おわりに、「孔子像」に見られる像主や四聖（弟子）の配置や背景の細かな描写、逆遠近法などは、御後絵と共に多くの部分が多く、独自の様式を想起させる。今後はこうした共通点に着目し、研究を続けていきたい

## 図版出典

図版1 「孔子像及び四聖配像」  
(沖縄県立博物館収蔵資料)

図版2 「孔子像及び四聖配像」  
(鎌倉芳太郎. 1982.  
『沖縄文化の遺宝 写真』. 岩波書店)

図版3 「鎌倉資料との比較」  
①背景部分. ②帳および縁. ③足下.  
④手すり (鎌倉芳太郎. 1982.) より加工

図版4 「那覇文廟（至聖廟）孔子像」

(鎌倉芳太郎. 1982.)

図版5 「十三代尚敬王御後絵」

(鎌倉芳太郎. 1982.)

図版7 「尚敬王（拡大部分） 蟒蛇模様」

(鎌倉芳太郎. 1982.)

図版6 「尚敬王（拡大部分） 八宝平水文」

(鎌倉芳太郎. 1982.)

- 1 鎌倉芳太郎. 1982. 『沖縄文化の遺宝 写真』 岩波書店 170頁
- 2 原田あゆみ. 1999. 「鎌倉芳太郎の前期芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術科学 第11号 沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 沖縄県立大学付属研究所 26頁
- 3 原田あゆみ. 1999. 26頁
- 4 鎌倉芳太郎. 1982.
- 5 原田あゆみ. 1999. 104-131
- 6 原田あゆみ. 1999. 56頁
- 7 笠森傳繁発行兼編集. 『啓明會第十五回講演集』 1924.
- 8 球陽研究会編集. 『球陽 読み下し編』. 角川書店. 1974. 453頁
- 9 沖縄県教育厅文化課. 『金石文』. 沖縄県教育委員会. 1985. 58・59頁
- 10 比嘉朝健. 「琉球歴代陶工家譜 中」. 美術研究所. 『美術研究 第五年二号』. 岩波書店. 1936.
- 11 比嘉朝健. 「琉球歴代畫家譜 上」. 美術研究所. 『美術研究 第四年九号』. 岩波書店. 1935.
- 12 比嘉朝健. 「琉球歴代畫家譜 下」. 美術研究所. 『美術研究 第四年十二号』. 岩波書店. 1935.
- 13 鎌倉芳太郎. 1982. 『沖縄文化の遺宝 写真』 岩波書店 154頁
- 14 沖縄県教育厅文化課. 1985. 54・55頁
- 15 田辺泰. 『琉球建築』. 座右宝刊行会. 1972. 51・52頁
- 16 琉球政府『沖縄県史 第19卷資料編9 (新聞集成社会文化)』琉球政府. 1969. 34・35
- 17 田辺泰. 1972.
- 18 金城正篤 上原兼善 秋山勝 仲地哲夫 大城将保『沖縄県の百年』. 山川出版社. 2005年. 68・98頁
- 19 清史編纂委員会. 『清史』. 国防研究院. 1961年.

- 1067頁
- 20 周煌. 原田禹雄訳. 『周煌 琉球国史略』. 榕樹書林. 2003. 415頁
- 21 杉原たく哉. 『中華図像遊覧』. 大修館書店. 2000. 27・28頁
- 22 『大漢和字典』では衰冕服の説明として『書』「益稷」、『詩』「幽風、九罇」、『傳』、『陳奂傳疏』、『周禮』「春官、司服」、『注』、『孔叢子』「陳士義」、『事物起原』「衣裘帶服部、衰衣」などの文章を挙げている。
- 23 周汎 高春明. 『中國傳統服飾形成史』. 南天書局. 1998. 6頁
- 24 黃能馥 陳娟娟. 『中華歷代服飾藝術』. 中国旅游出版. 1999. 336頁
- 25 李東陽撰 申時行修. 『大明會典』. 新文豊公司. 1976. 1018頁
- 26 沖縄県立図書館資料編集室. 『歴代宝案 訳注本第1冊』. 沖縄県教育委員会. 1994
- 27 原田禹雄. 『琉球を守護する神』. 榕樹書林. 2003年. 229-235頁
- 28 原田禹雄. 2003年. 232頁